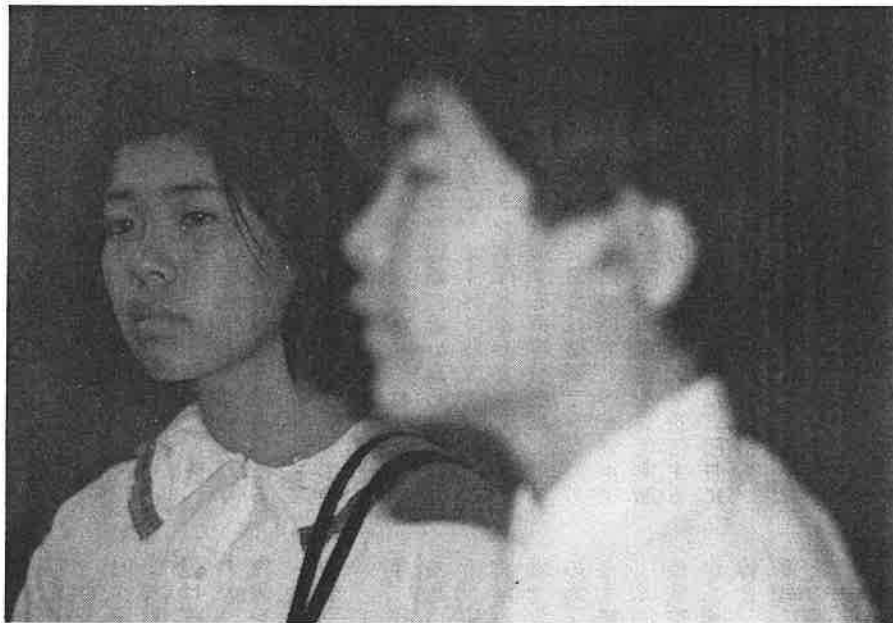


福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行
(財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



船の鼓動をきく— 2人の修学旅行。5月14日、奈良県立ろう学校。

開設十六周年を迎えて
第五福竜丸平和協会会長 川崎昭一郎

最近ドイツを旅行し、ボンのベートルベンの生家、ベルリンのチェックポイント・チャーリー博物館などをたずねた。

当時の生活環境の一端を垣間見させ、音楽を愛する国民性について考えさせてくれるベートルベンの生家、「ガンジーからワレサまで」と題した、人権のための非暴力闘争の歴史的一コマを綴った「壁博物館」のパネル——こういう所をたずねると自分自身についてつきつめて考えることができ、その機会を与えてくれた当地の人びと、地域社会、行政当局にたいする感謝の気持ちがわいてくる。

わが国が文化的、精神的な面で世界に貢献できることなかで、平和は重要な一項目である。

冷戦から協調へと世界が転換しつつあるいま、核兵器管理、核施設の安全性、核技術の頭脳流出、第三世界への核拡散など、世界全体が改めて核問題を真剣に考えようとしている。核と人類とのかわりについて正しい理解、核兵器禁止についてのしっかりした考え方をもっていた上で、第五福竜丸展示館のはたす役割は決して小さくない。

いま、わが国の人口構成で若い人の数が減ってきており、それとも関連して教育のあり方、見直しが論ぜられているが、広い意味での人間形成の教育、そのひとつとしての平和教育は学校教育でもっと重視されてよい。毎年十万人をこえる中学生、高校生が展示館を訪れている事実はいへん重いものがある。考え方がオープンで、偏見のない十代において与えられたインパクトは、生涯をつうじて意味をもちつづけるにちがいない。

第五福竜丸展示館がその真価を本場に発揮するのはこれからであるといえよう。

小さな修学旅行、自由なピース・オリエンテリングも

大きな船が抱きとるように小さな学校の中学生を迎えました。五月十四日、来館した奈良県大和郡山市丹後の里の県立ろう学校は、生徒二名、先生二名の修学旅行。おりから来館のたくさんの方の修学旅行の中学生、高校生の中にとけてこんで館内をめぐりました。

昨年暮れ、来館された先生が、東京への修学旅行には是非生徒を第五福竜丸にあわせたいと計画、来館に先立つ数日、同僚の先生はテレビの「又七の海」をビデオで五回も見、レジメを作って生徒と学習を重ねました。



5月19日、大石さんの体験を聞く修学旅行生

見上げるような船首、水爆の巨大な火球の写真の前、全身で手話通訳をされる先生の口元をみつめる二人の少女は輝いてみえました。同じ日、宮城県の山里から二十名の富岡中学校三年生が来館、今年も久保山さんの記念碑のうしろにすずらんの花を植えて見学、毎年先輩が植えてきたすずらんも小さな花を咲かせていました。厳しい自然環境の夢の島も五月はまさに風薫る候で修学旅行の中学生でいっぱい。ことは高校生の課外授業や、近くにマリナ開設もあってか休日には若いカップルがめだちます。

五月に訪れた高校は栃木県の藤岡高校はじめ十五校、それぞれ五、六人の班行動で自由学習です。神奈川県川崎市百合丘高校二年生四五〇名は「ピース・オリエンテ

船の周りに座って大石さんの話を聞く

五月十九日、京都府綾部市豊里中学校の三年生六十人は、開館時間を待ちきれぬように来館、大石又七さんを船の周りに座り込んで待ち受けました。通院中で体調はあまり良くないといながら大石さんは熱っぽく三十分余、あの日

リング・イン東京」として、都内の平和と戦争に関する遺跡・記念碑を巡る企画。深川親子地蔵、江戸川区の原爆犠牲者追悼碑、五百羅漢寺、集鴨ブリズン跡など二十余の選定ポイントを巡り、第五福竜丸展示館が必須ポイント。さあ次はどこだ、と地図やしおりを手に一日楽しそうな「自由行動」でした。

和歌山県の中学校はまた少し広がって六十校余が来館、作文、折鶴が贈呈され、応接にてんてこまいの状況。西牟婁郡大塔村の富里・三川・鮎川の三つの中学校は今年も一緒に来て来館、一校十人近くの学校ひとつづつ船の前に平和の誓いを述べ、持ち寄って一緒にした千羽鶴を船に飾りました。

「行く先も娯楽施設等が多い状況の中で第五福竜丸は修学の目的を満たしてくれる場所で、本校も事前学習をして臨みました。たいへ

と死の灰の三十八年を語りかけました。折から見学にきた東京府中高校の生徒も傍聴、質問もたくさん飛び出しました。

五月の来館者は一四四団体、三七、四五四名にのびりました。

ん難しい内容のある教材なので計四時間をさいてもなお未消化でありましたが、生徒は第五福竜丸から強い印象をうけ、なにかをつかんでくれました。後日、便箋一枚一枚にかかれた全員の感想文と先生の添え書きが届きました。

三重県多気郡多気中学校二百人の中学生は、展示館前で生徒の手による「平和セレモニー」を実施、「船に一礼」「原水爆被害者への黙祷」「館長さんの説明」「平和宣言」に続き、カンタータ「大地の歌」を合唱。贈呈された厚さ八センチ近くの作文集は、熱意にあふれていました。

協会第一〇七回理事会開く

五月二十日、協会の第一〇七回理事会が学士会館で開かれ、一九九一年度の事業報告、決算報告等を承認しました。

事業報告では、昨年度が第五福竜丸乗組員の自叙伝の出版、関係外交文書の公開などによって、ビキニ事件と第五福竜丸が改めて国民の関心をひいた一年であったこと、第五福竜丸展示館の管理運営面でも、年度内に七二二団体、六〇八学校、二十四万余の来館者があり協会の努力も実りつつあることなどを確認しました。

「はい、もしもし、丸大クリーニングですが・・・」
受話器の向こうから勢いよい声が響いた。やや気押されぎみになりながら、用件を切り出す。
「あの、大石又七さんのお宅でしようか。私、NHKの・・・」
どんな取材でも初めての電話は、いくらか緊張する。昨年十二月月初旬のことである。
『死の灰を背負って』を読み終わってしばらく、私は大石さんについて勝手にいろいろな想像をめぐらせていた。大石さんは年令で言うと私の父親とほぼ同じである。昭和ヒトケタの元マグロ船漁師。今はクリーニング屋のご主人。そして仲間たちの早すぎる死を間近に見つつ死の恐怖と背中合わせに生きてきたひとりの被爆者。事件のことすらよく知らない二十代半ばの私に、大石さんの気持ちをごれくらい理解できるだろうか。あれこれ考えたあと「とにかく、お

「又七の海」制作顛末記

東 野 真

会いしてみよう」と意を決して、電話に手を伸ばしたのだ。電話は、店先をたずねると大石さんはアイロン台の奥から少し離れたような表情で出てこられた。たくましい両肩とまっすぐな姿勢が「漁師」を感じさせる。「いやあ、大変なことになってしまったようで・・・あの本で本当に番組ができますか？」手記の朗読をベイスにして番組を作りたいという私の説明に対し、戸惑いながらも「亡くなった仲間のためになるなら」と一〇〇％の協力を約束してくださいました。
話し込むうちに話題が、手記の「被爆者の涙」の章のことに及んだ。大石さんは、ふと口ごもりしばらく考えこんでから口を開いた。「死産の話は、忘れたという気持ちもあります。でも、核を操る人たちに『この俺の気持ちがあるか』って、どうしても突きつけてやりたかった。家族に相談する

と書けなくなると思っ、ひとりで腹を決めて書きました。」大石さんの目にみるみるうちに涙が溜まった。私は、この人のためになんとかして恥ずかしいくない番組をつくりたいと、そのとき思った。それからの五カ月は、文字どおり悪戦苦闘の日々だった。事件についての本を読み、日米の外交文書の山と格闘し、関係者取材し、焼津や展示館に通う。調べていくうちに、第五福竜丸事件の重大さ、恐ろしさが次第に私にも呑み込めてきた。
アメリカは、ビキニ水爆実験に際して、あらかじめ世界中に放射能測定網を準備していた。アメリカが核攻撃された場合の市民への放射能の影響を知るためである。それゆえ大石さんたちの被爆事故は、皮肉にも人体実験という性格を持つことになってしまった。
大量の内部被曝を含む症例は、科学者にとって未知なる「貴重なデータ」だったのだ。
冷戦の力学の中で、貧しかった「友好国」日本に政治決着という選択が迫られる。「手切れ金」二〇〇万ドルの他に原子力技術の供与という「おまけ」までくっつい

ていた。当時の日米の外交官たちが、三八年たった今も、インタビューに答えて「あれは、円満で理想的な解決だった。」と口を揃えたのが印象的だった。それが「外交」というものののだろうか。しかし、事件の「責任」はおかげで三八年たったいまも宙に浮いたままである。
大石さん以外の乗組員の方々、遺族の方々にも取材への協力をお願いする中で、それぞれに複雑な思いがあることも知った。子供の就職や結婚にかかわる差別の心配、原水禁運動や政党・マスコミへの不信、過去のことは忘れたという気持ち。重い口を開いてくださった方々の言葉はどれも胸にこたえた。被曝の影響は、決して専門家の言う調査統計上の数字となつて表れるものばかりではない。心の傷の深さは、はかりしれないと思つた。
番組の制作にあたっては、多くの団体・個人の方々に迷惑をかけた。最後になったがこの場を借りて心よりお詫びとお礼を申し上げます。どうもありがとうございます。
(NHKディレクター)

核開発競争が残したもの③

核実験禁止から核兵器廃絶へ

斗 ヶ 沢 秀 俊

米国とロシアなど旧ソ連核保有四カ国の戦略兵器削減条約(S.T.A.R.T.)新議定書が五月二十三日に調印された。今後、米国とロシアは新たな核軍縮交渉に向かうと見られている。冷戦の終わりに伴い、核兵器削減は逆らえない流れとなっている。
その一方で、核実験は続けられている。
米国は三月二十六日、ネバダ核実験場で一五〇キロトン規模の地下核実験を行った。
さらに中国が五月二十一日、新疆ウイグル自治区のロプノル核実験場で大規模な地下核実験を行った。米国と旧ソ連との地下核実験制限条約(一九七四年調印、九〇年発効)では、最大規模を一五〇キロトンに制限したが、この中国の核実験は一メガ(一〇〇〇キロトン)級だと推定されている。米国は「規

模が大きすぎる」と非難した。
核実験を見合わせる動きもある。フランスは四月、九二年末まで南太平洋にある仏領ポリネシアのムルロア環礁での核実験を中止することを決定した。これに対し、ムルロア環礁に近い島しょ国はもちろん、オーストラリア、ニュージーランドなどオセアニア諸国も一斉に歓迎する声明を出した。
しかし、事態は楽観できない。九三年以降について、ベレゴボア仏首相は「他国の動きを見て判断する。核抑止戦略放棄を意味するものではない」と語った。四月に来日したジョッキス仏国防相も、核実験を行っていないのは「中断」であって「停止」ではないことを強調し、「核大国の状況を見て中断を継続するかどうか年内に判断する」と述べた。
フランスの動きの背景には、環

境保護政党が核実験停止を求めていることがある。国内向けの政治的措置であり、核兵器廃絶への方針転換とは言えないようだ。
ロシアの出口もはっきりしない。旧ソ連最大の核実験場だったカザフスタンのセミパラチンスク実験場は住民の反対で昨年八月閉鎖された。ロシアは昨年十月から、核実験を一年間の期限で凍結中だ。
しかし、「核戦争防止国際医師の会」の報告書によると、ブッシュ、エリツィン両大統領は今後数年、年二〜四回のペースで核実験を行うとの了解に達しているという。実際、エリツィン大統領は、北極海ノバヤゼムリヤ島の核実験場で今年十月以降、年間二〜四回の地下核実験を行う準備を指示する大統領令を出している。
米国は核実験を続行しながら、核戦略の見直しを進めている。核から通常戦力への移行を目指す路線と、核の力で第三世界での大量破壊兵器の保有や使用を抑止するとの路線が対立しているようだ。
一連の核保有国の動きは、各国が核を抑止力として保持する方針を基本的に変えていないことを示している。他国の状況を見ながら

の駆け引きが展開される構図は、核軍拡にしのぎを削った時代と本質的に同じだ。
経済的に困窮しているロシア、人口の爆発的増加に悩む中国はもちろん、米国や英仏も核実験や軍拡という壮大な無駄を許容できる状態ではないだろう。第二次世界大戦以降の歴史は核兵器の無意味さを明らかにした。核は使えない兵器であり、戦争を抑止する力さえなかった。
核爆弾が投下された広島、長崎の人々。核実験の被害を受けた第五福竜丸などの船舶の乗組員、ビキニ諸島住民。さらに、仏領ポリネシアやセミパラチンスク周辺の住民。核兵器と核実験がもたらしたのは、環境の広範な破壊と人々の不条理な苦しみ以外のなにものでもない。
核実験全面禁止、核兵器廃絶への流れは妨げようはない。これをより確固にして、より加速するため、ヒロシマ、ナガサキ、ビキニが繰り返し語り継がれる必要があるだろう。
(ジャーナリスト)

△完△